

ひょうたん島通信

大槌発! 第39回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



国際化と国内化

ひょうたん島と漁船。

木暮一啓 大気海洋研究所附属地球表層圏変動研究センター
生物遺伝子変動分野 教授

“赤浜の東大”の正式名称は国際沿岸海洋研究センターである。1973年に大槌臨海研究センターとして設置されたが、2003年に、改組、改名されて今に至る。個人的には、大槌といういわば小さな町の研究センターが“国際”を謳うのは当初おおげさな印象を受けたが、2011年の東北地方太平洋沖地震の翌年に東北マリンサイエンス拠点形成事業が動き出してから、この町の名前は国内のみならず、世界に知られつつある。

ここ数年、私は毎年複数の国でこの研究事業の紹介をしてきた。地震と津波から何年か経ち、海はどうなっているのか、漁業はどんな状況なのか、街はどうなっているのか、などなど。その際、大槌町から話を組み立てる。そうした話をした日の夕食時ともなると、同席した人々から海の話に加えて何故復興が遅れているのか、フクシマはどうなっているのか、というような質問が立て続けにやってくる。先日のオーストラリアでの学会の際には東芝の破綻まで話が広がった。多分私が震災の話をしなければそんな話まで行きつかなかっただろう。そう、こうし

た議論は海の話や大槌をはるかに超えて、今の日本についての話になるのだ。普段の自分の専門に関する学会だとこんな話は出ずに、Shinkansenと

Kyotoの話をしていれば事足りてきたのだが。そして、自分がこれまで海外で無意識のうちに東京の人として振舞ってきたことに気づく。

さて、確かに東北の漁村は漁業の後継者難、復興の遅れ、人口減少などで厳しい状況にある。大槌町の中心部にもまだ空き地が目立つ。しかし、大槌から東京を見ると、果たして安穏としていられる場なのだろうか。例えば東京は食べ物もエネルギーも実質的に全て外からの供給に頼っている。さらに、国内で得られなければ、食べ物は輸入すればよい、と多くの人が漠然と考えている。しかし、



その期待の根拠は実は希薄であろう。

わが大学が国際化を希求すること自体は大変結構かつ大事なことで、私は思っている。ただ、我々構成員が我が国の現状についてどのような視点を持ちつつ海外と付き合うのか、そして、そこでどんな将来像を話し合うのか。東京大学のビジョン2020には、一次産業や地方と都市との在り方を展望するような文言は見えない。それは我々の意識の“国内化”の欠落とでも言えまいか。そうしたビジョンを私はどうにも空疎な思いで見つめてしまうのである。

調査船「弥生のつばやき」

「最後」の一般公開

去る7月16日、国際沿岸海洋研究センターの一般公開が行われました。先日お伝えしました通り、新しい係船場が完成しましたので、私「弥生」も内部を公開することになりました。これまで、遠くから眺めるしかなかった一般公開に、遂に私も参加することになったのです。久しぶりの参加に準備から胸が躍りました。船舶担当職員の方々が、前日からお客様を迎え入れるための梯子を整えてくださり、当日の朝には万国旗や大漁旗で華や

かに飾り付けてくれました。今年は700人以上の人出となったそうで、私もセンターの皆さんとともに、新しい港で大勢のお客様をお迎えすることができたことを誇らしく思います。

一方で、今年は、現在のセンターの建物で行う最後の一般公開でした。新しい建物はこの賑わいの向こう側に着々とその姿を現しつつあり、この景色は間もなく一変します。近く訪れるセンターの歴史の節目を感じ、嬉しさと寂しさが入

り混じった1日でした。



久しぶりのおめかしに、少々気恥ずかしい私です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）